

憎かった父の存在を 宝に変えることができた。

松江教会 新宮良和さん

新宮良和さんは、働かずに昼間から酒を飲み、母に暴力をふるう父をずっと憎んでいた。耐え難い修羅の日が続く中、母との離婚裁判中に父は自ら命を絶ってしまう。残されたのは多大な借金。社会に出て働いても返済がのしかかり、父への憎悪は募るばかり。しかし、安易に消費者金融に手を出し、借入れを繰り返すうちに抵抗感がなくなり、気がつけば、父が残した借金の返済が終わっても、今度は自分の生活費のために借り有り様で…自らが苦悩を生み出してしまったのだ。そんな悶々とした日々の中で、自分の生い立ちや悩みを親身に聞いてくれる人との出会いが人生の転機となった。そしてその人から、誰もが菩薩であると諭される。すぐには受け入れられなかったが、自問自答をくり返していく中で、父への憎悪にとらわれているうちに自ら苦悩を生み出していたのだと気づき、父への感情は退いていった。新宮さんは今、父の存在を宝に変えることができたと確信している。



第二の矢を受けない

私たちは毎日いろいろなできごとに出会い、喜怒哀楽さまざまな感情を抱きます。人間としてそれは当たり前のごとで、そうした感情の二つを釈尊は「第一の矢」といいます。ただ、私たちは心に抱いた感情のうち、自分の好ましいものは「もっと」「ずっと」と望み、執着します。逆に、いやなものは避けて嫌い、そのときどきに起こる欲や自己中心の見方によって自ら苦を生み、悩みを深めます。では、どうすれば苦楽の海に溺れることがないのか——その答えは、最初に抱いた感情にとらわれないこと、つまり「第一の矢」を受けないことだ、と釈尊はいうのです。禅の世界に「二念を継がない」という言葉があります。煩惱がわいても、それを追いかけてあれこれ思いをめぐらさない、心に浮かんだ思いを妄想でふくらませないということですが、たとえば、おいしそうな食べものを見て「食べたいな」と思っても、そこで止まるなら、けっして懐は痛まず、体に影響しないので苦は生じません。煩惱といい、苦悩といい、それらは自ら生みだしているものです。ですから、心をうまくコントロールできれば、よけいなことで思い煩わなくてすむのです。

立正佼成会